

Theorem1.08

2022 年 9 月 29 日

概要

直交座標系 Σ_o , Σ'_o は, 原点と, スケールが一致しているとき, ベクトル \mathbf{p} が, Σ_o において,

$$\mathbf{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ p_3 \end{pmatrix}$$

Σ'_o において,

$$\mathbf{p} = \begin{pmatrix} p'_1 \\ p'_2 \\ p'_3 \end{pmatrix}$$

と成分表示されるとき,

$$\exists U, \begin{pmatrix} p'_1 \\ p'_2 \\ p'_3 \end{pmatrix} = U \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ p_3 \end{pmatrix}, U^t U = E \quad (1)$$

本証明

Σ_o の基底ベクトルを, $\{\mathbf{e}_i\}_{i=1}^3$ とすると,

$$\mathbf{p} = \sum_{i=1}^3 p_i \mathbf{e}_i \quad (2)$$

Σ'_o の基底ベクトルを, $\{\mathbf{e}'_i\}_{i=1}^3$ とすると, Σ'_o での 1 方向成分は,

$$p'_1 = \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{p} = \sum_{i=1}^3 p_i \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_i \quad (3)$$

他の成分も同様なので, 縦に並べると,

$$\begin{pmatrix} p'_1 \\ p'_2 \\ p'_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} p_1 \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_1 + p_2 \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_2 + p_3 \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_3 \\ p_1 \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_1 + p_2 \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_2 + p_3 \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_3 \\ p_1 \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_1 + p_2 \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_2 + p_3 \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_3 \\ \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_3 \\ \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ p_3 \end{pmatrix} \quad (4)$$

よって,

$$U = \begin{pmatrix} \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_1 \cdot \mathbf{e}_3 \\ \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_2 \cdot \mathbf{e}_3 \\ \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}'_3 \cdot \mathbf{e}_3 \end{pmatrix} \quad (5)$$

により, 座標変換が与えられることがわかった. この行列 U の (i, j) 成分は,

$$U_{ij} = \mathbf{e}'_i \cdot \mathbf{e}_j \quad (6)$$

と表されることに注意. (i, j) 成分表示を利用して, $U^t U$ を計算すると,

$$(U^t U)_{ij} = \sum_{k=1}^3 U_{ik} ({}^t U)_{kj} = \sum_{k=1}^3 U_{ik} U_{jk} \quad (7)$$

ここで, $U_{ik} = \mathbf{e}'_i \cdot \mathbf{e}_k$ は, \mathbf{e}'_i の, Σ_o 系での表示における, k 成分であり, $U_{ik} U_{jk}$ は, $\mathbf{e}'_i, \mathbf{e}'_j$ それぞれのベクトルの, Σ_o 系表示での成分の積である. したがって, 2つのベクトルの成分の積を, 全3成分に対して加算している, 式(7)の右辺は, \mathbf{e}'_i と, \mathbf{e}'_j の, Σ_o 系で計算する内積である. Σ'_o が直交座標系であったことから,

$$\mathbf{e}'_i \cdot \mathbf{e}'_j = 0, i \neq j \quad (8a)$$

$$\mathbf{e}'_i \cdot \mathbf{e}'_j = 1, i = j \quad (8b)$$

なので, $U^t U$ は, 対角成分が1, それ以外のすべての成分が0の正方行列, すなわち単位行列 E である. よって, ${}^t U = U^{-1}$ であり, 前から ${}^t U$, 後ろから U を作用すれば,

$$U^t U = U^t U = E$$

である. なお, 式(7)で, ${}^t U U$ を計算してしまうと, Σ'_o 系での, \mathbf{e}_i と, \mathbf{e}_j の内積計算の議論になってしまい, これは前提として次の Theorem が証明されるまで使えないので, 逆を計算している.